

## コミュニティとコミュニケーション

前号より編集委員長を務めることになりました。「分子研レターズ」は分子研の機関誌兼活動報告誌であり、同窓会誌であり、コミュニティ誌です。私は分子研に来てまだ4年と少しですので、あまり分子研卒業生の皆さんやコミュニティの顔ぶれを存じ上げているわけではありませんが、前編集長からのご指名があったのは、これまでの経緯にあまりこだわらず、自由にこの会誌を発展させていって欲しいとのお気持ちからであると勝手に解釈させて頂いて、より皆さんに読んで頂ける内容の充実に私なりに努めていきたいと思っております。

さて、私が分子研に来て最初に驚いたことのひとつに、コミュニティという言葉の使われ方があります。それまで自分はコミュニティに属して研究しているという意識はありませんでしたので、運営委員会などで「コミュニティ」が当然のように存在していて、その要請の元に分子研が活動している、という論理に少々違和感をいただきました。このようなロジックは、コミュニティに所属していない研究者（≒かつての自分）に対して排他的な雰囲気を持つような気もしましたし、こちらが定義するコミュニティと個々のメンバーが思っているコミュニティが異なる場面も十分想像されましたし、基本的には個人的な営みである自然科学研究の独自性・独立性を損なう言葉であるようにも聞こえたからです。その後、分子研設立時の経緯など、先人たちの多くのご苦労があって分子研が設立されたことを知るようになり、また設立時から極めて学際的かつオープンな思想が共有されていたことが分かりましたので、前述の心配は、基本的には自分の勉強不足かつ杞憂であったことが判明しました。しかし同時に、その時感じた印象をすべて忘れてしまって良いものだろうか、という疑問が自分の中に残ったのもまた事実です。実際、少し話してみると、分子研の内外にも、最初の私の印象と似たような感想を持たれている方はいるようです。ですから、確かに大型プロジェクトの開始や大型施設の運営には研究者達の意見の集約が必要ですし、これまで分子研が行ってきた若手の育成という場面においては、所属PIのエゴイズムを超えた大きな視点での判断が必要となりますが、少なくとも個々人の研究という場面においては、コミュニティと研究者各人の距離の取り方・かかわり方は人それぞれ、場面ごとに変化してくるものなのでしょう。

Communityという言葉の語源を調べると、ラテン語で「共有」を意味する *Communis* から来ているようで、同じ言葉から *Communicate* という動詞も派生しています。ですから語源から考えると、コミュニケーションという活動は、一方的な情報の伝達だけではなく、相手の意見も聞いて、やり取りをしながら情報・目的・価値観などを（場合によってはその違いも含めて）「共有」していく過程のことだと言えるでしょう。逆に考えると、Communityとは、そのようなコミュニケーションが頻繁にあって初めて成立する共同体なのではないかと思っております。ですから、コミュニティというものは、なかなか目に見えず不思議に思うこともありますし、「あって当然のもの」と考えることはやはり定義からしておかしい気がします。そういった疑問をはるかに吹き飛ばすだけの、構成員による活動・想い・努力によって、常に支えられ、維持されているものなのでしょう。また、コミュニティそのものには少し距離を置いていても、コミュニケーションには積極的に参加して下さる方もいるかもしれません。そして分子研レターズは、そのようなコミュニケーションの一部を構成している重要なコンポーネントの一つなのだと、改めて思っています。

最近、思いがけない場面で「レターズ読みましたよ」と声をかけて頂ける機会がたびたびあり、私のような新参者もコミュニティが確かにあることを感じられるようになってきました。「分子研レターズ」がこれからも皆さんのコミュニケーションを活発にする一助となるよう、精一杯努めていきたいと思っております。紙面へのアイデア・ご意見・感想・ご希望などありましたら、どうぞお気軽にお寄せ下さい。

(山本 浩史 記)

On ne voit bien qu'avec le coeur. L'essentiel est invisible pour les yeux.

「大切なものは目に見えないのさ。心で見ないとね。」

“Le Petit Prince” Antoine de Saint-Exupéry